

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520560
 研究課題名（和文） 文化を跨る媒介者として変貌するエスニック芸能者群像の文化関係論的文化的文化人類学的研究
 研究課題名（英文） Transcultural and transformational phase of identities and cultural expressions of ethnic artists-performers as intercultural mediators in the face of cultural others: a research based on the perspectives of cultural anthropology and cultural relations
 研究代表者
 宮坂 敬造（KEIZO MIYASAKA）
 慶應義塾大学・文学部・教授
 研究者番号：40135645

研究成果の概要：

伝統的文化社会で文化の象徴的表現者の役割を担ってきたシャーマン系民間治療者・芸能者、更にはethnic artistsがグローバリゼーションの進展と相俟って変貌してきたその有り様と特性に焦点をあて、本研究は、文化関係論的文化的文化人類学的見地から、その特有の姿を「変貌する<エスノ文化表現>者」という概念枠組みで捉え、文化を跨る媒介者として変貌するエスニック芸能者群像の内外の比較事例調査実態を実施し、関連資料の収集と分析を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,600,000	450,000	4,050,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学/文化人類学・民俗学

キーワード：エスノ文化表現者、間文化媒介表現者、間文化ネットワーク、間文化身体、芸術と医療の人類学、文化関係論

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究開始以前に、慶應義塾大学アートセンター所員として韓国済州島の神房の儀礼を韓国伝統芸能として公演する企画や中国雲南省からのチベット族の民族芸能に関する研究公演企画に関わった。特に後者は、基盤研究（B）服部等作（研究代表者）『中国雲南省・四川省藏族における工芸と芸能の記録保存と文化伝承をめぐる国際共同研究』（平成12年度から15年度：初年支給額5,700千円、以降の実際交付額は不明：宮坂への実

際支給額は、2000年度554千円、2001年度0円、2002年度1,060千円）の研究分担者として、「中国雲南省奔子欄藏族の芸能の文化的な位置」を研究分担調査する展開となった。もともと、この計画は宮坂が同地からの来日芸能団を1999年10月慶應義塾大学アートセンター研究公演として招聘企画した時に、団長の魯英明雲南省迪慶藏族自治州文化局長（当時）と現地文化調査研究交流同意書を取り交わした事に発し、中核的な研究枠組は宮坂が作成したが、実際に行いえた短期調査では、

本研究の課題は萌芽的に潜んでいただけであった。とはいえ、本研究に示唆的な知見も得られた。特定の経緯により、他の少数民族の芸能と混交するようなメディア芸能の編成の影響が若者にみられ、伝統文化の継承というより総じて漢民族や先進国からの観光客の興味をひくような芸能者に切り替わっていく傾向がある点が部分的ではあるが把握されたからである。文化継承を推進する役割を果たそうという担い手が二重言語使用者として内外を媒介し、内部からの entrepreneur 精神 (F. Barth のいう外来からの変革者 entrepreneur 概念を内部者に拡張して使用) を発達させるような、民族文化も財とする企業家になりつつある例にも接した。本研究の枠組からみれば、この例は、内外を媒介して民族集団内部を変革する文化表現者の一例として捉えられよう。そのような群像は、象徴的に文化表現を再構成するばかりでなく、経済的過程でも変革を惹起する主体でもあろう。文化を跨る媒介者として変貌するエスニック芸能者類型がここにある点に気づき、複数の文化が交錯する現場を文化関係論的に研究する意義に思い至った。(2)以下の過去の調査も部分的準備的段階としては本研究に関連 カナダ政府支給 Faculty Research Grant (1993 年度) Identity Transformation Processes of Ethnic Artists in Multicultural Canada、Keizo Miyasaka (同大使館を通じて6千カナダ・ドル支給 英文報告論文を提出、Northrop Fry Centre, Victoria University in the Univ. of Toronto で、94年3月に Colloquium 発表)。印系、日系、ウクライナ系の ethnic artists の生活史、民族観芸術観変遷、先住民との共同製作等の事例を調査検討して、アイデンティティ変容過程のパターンを分析。当時は本研究のような包括的枠組みはもっていなかったが研究方法は関連している。調査地候補として選定した沖縄であるが、96年文部省大学院留学生 K. Stormen (ノルウェー-Berger 大学社会人類学院生)の沖縄研究を指導する過程で、同地長期在住の外国人アーティストたちと接したことが本研究で候補集団と判断しえた準備的経験になった。また、2001年から2年間、宮坂は田中泯主催桃花村舞踏集団の研究顧問としてロシア人芸術研修生3人を含む外国人アーティストの日本での訓練過程の一部を参観した経験があるが、この経過も本研究の構想を用意するきっかけとなった。

2. 研究の目的

地球規模に跨って人々の相互接触・交信・トランスナショナルな移動や一時滞在が頻繁となった現代世界では、文化も多様に絡み合いネットワーク化したかたちで相互に影響

しあっているが、それに伴い、いわゆる伝統的な文化社会の変容にも、現代的な交錯の形がみえる。本研究では、伝統的文化社会において文化の象徴的表現者の役割をはたしてきた民間治療者(シャーマンを含む)・芸能者、ethnic artists を一括りの対象として扱えるとみなし、彼らが現代世界で特有の変容・変転を示している実態を把握し、その社会文化的分析を試みることを目的とした。この課題を明らかにするため、芸術と医療に通底する<エスノ文化表現>〔後述〕形成過程を分析する新構想設定と、それに基づく文化人類学的・文化関係論的比較事例調査、一部は関連稀少文献と稀少映像資料の収集、を行う計画をたてた。この実態調査自体が特に本邦では殆どなく、また、本研究の新しい研究枠組を示す諸研究は知見の範囲では見当たらないため、先駆的意義をもつと考えた。新研究枠組の一部は、芸術・医療の人類学、文化精神医学、および、先住民や異文化の伝統芸能・芸術に接触する international artists との学際的共同作業に由来する。更には、近年内外で目に付く transnational な移動のさなかで変転する ethnicity 研究の潮流に対して、本研究は全く別の視角と構想から資する点が少なくないと考えられた グローバリゼーションの影響下、伝統的文化表現者は広域文化ネットワークの中に再定位されて R. Robertson のいう glocal な作用機序の過程の中で自らの文化的アイデンティティを再構成するし、A. Giddens 指摘の Reflexive Modernization 過程を象徴化する文化表現者として自らを変容させる。電子的伝達媒体をも介した transnational な ethnoscape (A. Appadurai) 存立の過程で、彼らは特有の意味で象徴的に重要な役割を果たしていることが予想された。この点が絡む本研究は Diasporic な ethnicity ethnoscape 研究に連なっている。彼らの変容経緯には、現地への来訪異国人との接触、外国へ一時滞在、国外移住、の3タイプの経験が深く関与していよう。即ち、local な現地の文脈で、また transnational な移動による文脈で、先進諸国に代表される文明社会の異文化他者を典型とする外部者の視線に接触し、両者相互の關係に媒介されることを必須の契機としつつ、彼らは自らの出身集団の文化表現を変容・再構成させる<間文化的主体>となる。新たに生成しつつあるこの<間文化的主体>を本研究では<エスノ文化表現者>の用語で概念化することを試みた。上記の研究枠組に立ち、(a)日本国内に散見されるエスノ文化表現者の事例を収集し、彼らと外部来訪者鑑賞者との關係構築の事例(海外渡航時の異文化経験事例も含む)を該当事例の観察・記録を通して調査。(b)プロモータ等

を介して我が国に来訪する外国からのエスノ文化表現者の芸能・儀礼公演等の事例への接触と事例資料の収集調査、(c)彼らが生活の基盤をもつ国外 ethnic 集団コミュニティ - の現場での短期の比較調査、を平成 16 年度から 4 年間にわたって計画実施。東京に来訪する外国人エスノ芸能者について日本側プロモ - タ - や招聘助成機関との関係に注目しながら事例収集。また、東京在住滞在の外国人儀礼治療・芸能者に接触して事例収集。外国人一時居住者と接触する沖縄等の芸能者・民間治療者の事例の一部収集の試行以上の国内調査が主眼であるが、モントリオールの多文化社会にみられるエスノ文化表現者について比較のための事例収集（海外共同研究者 J.Montpetit[モントリオール所在の National School of Theatre 講師]、L.J.Kirmayer（カナダ McGill 大学文化精神医学部門所長・教授）と連携）、Queensland（Edwards[Queensland 大学レジデント作家]と連携）で先住民系のエスノ文化表現者の事例の収集も行うことを研究目的とした。

3. 研究の方法

(1)はじめに：「文化をまたがる媒介者として変貌するエスニック芸能者群像の文化関係論的文化人類学的研究 現代の多文化的混成状況に照らしたその<エスノ文化表現>形成過程における役割」と題する本研究は、国内調査を主としつつ、先住民や移民が多様に存在し多文化多民族社会が特徴であるカナダのモントリオール、トロント、ヴァンクーヴァー、およびオーストラリアのクウィーンズランド、アリスプリングズ、シドニーでも比較調査と文献調査を計画した。

本研究は、現在までそれほど活発に行われていない<芸術・芸能の社会科学的文化人類学的研究>という志向ももつが、文化人類学・民俗学からの芸能・儀礼研究を再考することも課題にしている。本研究の半分は、現代的变化のなかでの新しい芸能・儀礼の形成に焦点をあて、担い手・表現者・芸能的治療者の価値観/世界観や技法/技能、アイデンティティの変容をとらえ、社会文化的分析を加えうるような、厚みのある事例を蒐集することになる、と予想したからである。また、新しい芸術創造を行うための手だてとしていわゆる未開の芸術や自分たちの文化圏とは非常の異なる出自の芸術・芸能を志向するような現代芸術家たち・芸能家たちの事例も扱うこととした。加えて、彼らにかかわる媒介者・支援者の事例も関連して扱うこととした。さらには、伝統的民族芸能の国際的上演興業の機会・市場の進展により、彼らが外国に訪問・滞在・移住する事例がますますみられるようになってきているので、この点で、彼らを扱う本研究の事例調査はトランスナシ

ナルな移動によるディアスポラ集団の展開をはじめとする、ethnicity 再考問題検討に繋がってくると予想した これに関する選考研究である宮坂 1998 年の論文「交錯する<エスノ芸術>」では、メキシコの山岳マヤ族系の呪医 M. Sabina が アメリカ人 G. Wasson 夫妻に見出されて先住民詠唱詩人 ethnopoeet として紹介されていった経緯を文献の検討を通して触れ、また、現在では彼女の姪筋の女性がカナダに現代舞踊を学びにきていて、多文化状況のさなかで二重コード使用者となり、特有の想念を表現しているという事例を紹介した。そうした事例をできるだけ蒐集するのが本研究の計画であった。平成 17 年度は、この調査を予備調査として行うこととした。 宮坂 2002d の論文では、グローバリゼーションとディアスポラ時代の他者像変容の問題を検討したが、同論文後註のなかで、2001 年 7 月に来日公演したシベリア・サハ族シャーマンのニキフォロフ氏との会談・質問（Yuri Sheikin を介して）によって見出された国際的シャーマン・ネットワーク形成について指摘した。J. Rothenberg 1983 等で示された先住民の始原的芸能性に接近・共振するという方向性は、P. Brask & W. Morgan 1992 で示されたコロニアリズムの文脈で転倒し（Edith Turner 指摘の北米先住民伝統性が、植民地主義への対抗を経て reflexive modernization の様相下の芸能再構成過程で新展開していること）、更に S.A. Ness 1997（フィリピンの舞踊変化分析）の検討によるポスト・コロニアリズムの文脈による転位という様相まで広がっていくのである。 本研究の枠組では、このような民族芸能自身の展開、それを捉える視点の転位という問題問を、

internationalism/interculturalism から transnationalism/transnationalism への展開という視角から捉え、グローバリゼーションとディアスポラ論の一環に位置づけて検討してみようと考え、その方法を考案する。(2)平成 17 年度の具体的調査計画・方法：

国内で調査地として、東京では、来訪する外国人エスノ芸能者について日本側プロモ - タ - や招聘助成機関との関係に注目しながら事例収集し、また、東京に在住滞在する外国人儀礼治療・芸能者たちに接触して事例を収集することとした。那覇市出張調査（5 日）では外国人一時居住者と接触する沖縄の芸能者・民間治療者の事例の収集を主眼とした。京都（出張 3 日）に在住滞在する外国人集団と関わりをもつ日本側芸能者たちについて事例収集し、また、東京在住の外国人儀礼・芸能者たちとのネットワークにも注目することとした。以上の国内調査が主眼としつつも、カナダ・モントリオールの多文化社会にみられるエスノ文化表現者について比較

のための事例収集を予備的に実施することとした。先住民の血をひき、さまざまなダンスを行ったのちに日本で暗黒舞踏を学んだ経緯をもつ創作舞踏家 J. Montpetit を通じて関連事例を収集し、文化精神医学の世界的第一人者でカナダや豪州先住民族の現状やその伝統医療・芸術にも造詣の深い L.J. Kirmayer とともに儀礼治療・芸能者が多文化社会においてエスノ文化表現者に変容していく過程について準備的分析を行うこととした。第一年度は予備段階にあたる研究であるが、その範囲内で、エスノ文化表現者のいくつかの類型を試論的に立てること、即ち、自らを取り巻くローカルな文化社会状況に基づきつつ外部接触を介して彼らが多文化的な反照的な二重コード使用者になる過程の、諸タイプの抽出を行うこととした。その際、以下の諸点に留意した事例の蒐集・分析を採る方法を立てた。

同じ地域的伝統に連なる芸能・儀礼的治療者の場合でも、その表現方法において、継承の在り方で予想以上に、想念・理解・焦点の当て方に違いがみられる可能性がありうる。

それら表現方法の差異化の経過は、緩やかな社会組織関係過程の転変に呼応して現われる傾向がみられると想定。即ち、表現者・芸能的治療者の価値観はとりあえず芸能的側面において分化していくが、にもかかわらず文化社会的関係様式の中での彼らの人間観・社会観の再構成とともに分化していく側面もある。そのため、たとえ「伝統的」であると自他ともに捉えていたとしても、その実、現代的社会的変化の特質に関連した変化をみせている諸特徴が分析的に指摘できうる。

現代的芸術を志向する表現者の場合にも、構造的には同型の表現分化過程をもつ事例にふれることを通じて、彼らが自己理解する伝統・前衛・現代という想念・実践的芸術理論を分析的に捉えれば、上記と同じ経緯がうきあがると想定。

身体所作と身体感覚と芸能・芸術表現という面にも焦点をあてる。この点からみると、伝統芸能・治療儀礼者の場合も、現代芸術を志向する舞踊家・舞踏家の場合にも、きわめて現代的な身体意識の展開がみられ、それに呼応した身体技法の開拓展開が窺える場合があると予想。

治療者が芸能者に転換する事例に注目。

上記に加え、Diaspora 型の移住による Ethnic Artists 事例に着目。

文化を跨る媒介者として変貌するエスニック芸能者類型を抽出するため、多様性の幅をもつ事例・〈エスノ文化表現者〉群像を比較調査する。更に、彼らが〈エスノ芸術〉形成をする傾向に着目する。

上記の諸側面を分析するという研究方法に基づき、インフォーマントとの接触、良好

な関係の構築が第一段階となるわけであったが、キー・インフォーマントを確定したあとは、quota sampling 法に従って、別の事例接触の機会をえる通常の研究方法を用いることとした。モントリオールでは上述の二人の海外共同研究者の協力をうけて、これを円滑に行っていくが、面談は主として英語によるものの、フランス語の場合は海外共同研究者から通訳助力をえることとした。その他の言語の場合は、必要に応じて計上した謝金の枠内で通訳者を雇うやりかたとした。

上記のように本研究は主として現地調査（面談、観察、生活史蒐集、象徴的表現としての儀礼・芸術的表現過程とそれに呼応する社会過程の参与観察）によるが、関連文献資料の収集、文化表現活動にかかわる映像記録資料、エスニック芸能者として転換していく過程を示す言説資料収集も行うこととした。その経緯で高額な稀少資料・稀少映像資料にも注意して、それらの所在を確認していく可能の一部を探る機会も模索することとした。

(3)平成 18 年度： 予備調査以降の 2 年目を本調査その一として行うこととした。国内調査としては、東京での継続調査。また、長野で行われる民俗・民族芸能公演の参与観察および沖縄での継続調査を行うこととした。海外調査は、オーストラリアのプリズベンとその周辺で同上の調査を実施することとした。

(4)平成 19 年度： 本調査その二として、前年と同様の調査を行うこととした。国内調査としては、東京での継続調査。北海道日高地方の平取町と静内でのアイヌ系儀礼・芸能・芸術家の事例蒐集継続調査（出張 4 日）、また山梨・岐阜で国際的活動も行う地元の伝統民俗芸能・芸術家の事例蒐集の継続調査を行うこととした。また、昨年度から年度をまたがったかたちでオーストラリア・アリスプリングズとシドニーで先住民系儀礼芸能者・芸術家および彼等と関わる非先住民系の芸能者・芸術家および支援者たちの事例調査を、Rebecca Edwards の協力をえておこなうこととした（Edwards は、父が政治に携わり、先住民援助活動を行ってきたのを幼少時から体験し、先住民世界観に連なる作品や先住民問題に潜む心性をテーマとする絵画作品を発表してきた詩人・画家・作家）。2001 年 11 月 1 日にオーストラリア大使館文化広報部の後援をうけて宮坂企画により慶大で講演した先住民劇作家兼演出家の Wesley. Enoch 氏の先住民劇団活動、2002 年 11 月 14 日、三田で宮坂が数時間面談したオーストラリア先住民劇作家 Jane Harrison の関係する先住民文化活動集団などにも接する機会を探ることとした。

(5)平成 20 年度： 本研究のまとめの年として、同様の調査を継続し、同上の方法でデータ整理と分析、研究成果の一部の発表を行う

こととした。国内調査の補足調査。カナダのヴァンクーヴァー、トロント、モントリオールでの追加補足調査、さらに、マックギル大学 Kirmayer 教授の研究機関訪問によるまとめの研究討論機会をもち、以下を検討。

多文化社会における間文化的関係位相の成立過程と transcultural な媒介機能、そうした位相で新しい象徴・メタファーが形成される様相、人類学的文化精神医学的儀礼理論が〈エスノ文化表現者〉の象徴表現活動の適用可能かどうかを最終的に検討する。

Diasporic な ethnicity-ethnoscape 研究が手がける諸研究課題に連なる本研究調査事例の抽出・類型分けと分析に意を払うこととし、その作業により、異類型にみられる群像と文化社会的状況背景の分析を通して、それらに通底する文化動態の構造的特性を抽出し、エスノ文化表現形成についての中範囲の理論設定を試みる。

なお、本研究は新しい研究構想を、比較的低位な予算枠内の限定した事例蒐集による質的検討を通して実現しようとするもので、その成果は網羅的最終結論的なものとはならないと思われる。期待されるのは、先駆的成果であり、本研究の成果は、将来の本格的海外調査基盤研究(A)計画に進む基礎となる性格のものであると考える。

4. 研究成果

外部の他文化の人たちからの新たな関わりによって生成する間文化的接触位相のさなかで、「文化を跨る媒介者」たる〈エスノ文化表現者〉たちは、自他文化のはざまに身を置き、自分たちの文化的アイデンティティを新しい間文化的状況のなかで再定位する様相を示している。そうしたエスニック芸能者群像の文化人類学的・文化関係論的比較事例実態調査を実施し、社会文化的分析を試み、また、関連資料の収集を行った本研究の実施内容とその成果の概略は以下であった

国内では、東京に訪れる外国人訪問 ethnic artists さらには、舞踏修業ないし共同公演に関連して短期に訪問する外国人アーティストや民族芸能家の事例の収集を中心とし、上述各地の事例を収集した。一部は、上述したように、海外研究協力者の協力をうけて海外調査を実施し、オーストラリア(ブリスベン、アリススプリングズ、シドニー)とカナダ(ヴァンクーヴァー、トロント、モントリオール)で先住民族アーティストやシャーマン系の芸能者の事例を収集し、また、多民族社会における ethnic artists (特に舞踊系アーティスト)の関連事例、および関連資料文献の調査も行った。事例調査は配分予算にあわせて規模を調整して設定したため、研究計画を各年度予ごとの算枠内に合わせて調節・縮小する経過があったが、ミニマムエセ

ンシャル達成の範囲での規模を確保して実施しえた。現代日本では、世界の各地から先住民族系もふくめた民族芸能者、ときにはシャーマン系の背景をもつ芸能者の来日公演・興業の機会がもたれている。さらには、日本の伝統芸能者・儀礼執行者や彼らをサポートする各地の集団が、いくつかのパターンを示す経緯で、海外から来訪する同種の位置をもつ芸能者・儀礼執行者と接触する事例も散見される。これらは、一面では、グローバル化下で進展するアート・伝統民俗・民族芸能興業の世界的マーケット化の現象に呼応する事例、という側面を示していたと分析された。と同時に、再帰的近代化論が着目してきた伝統の再帰的創造的再構成の展開経過の具体的事例でもあり、さらには、グローバル化によるトランスナショナルな展開を示す様相をも呈示している特徴事例の側面も観察されたのであった。本研究でいう〈エスノ文化表現者〉たちは、自分たちのよって立つエスニック・地域集団に根ざす文化的伝統的資源を伝承・維持・再獲得する経過とともに、ローカルレベルに対するナショナルなレベルさらにはトランスナショナルなレベルで接触する他者の視線に向き合い、「伝統」資源をそれらのレベルに複合的交錯的再帰的に参照して再構成変容させてもいる。さらには、ほかのエスニック集団出自または他国出自ではあるが、自分たちと同様の立ち位置にあると知覚しうる他のエスノ文化表現者たちと交流して潜在的顕在的ネットワークを形成している事例も観察された。そのネットワークのなかでの相互のやりとりを「伝統」文化再構成の重要な契機としている事例群であり、その潜在的ネットワークはたとえば日本で行われた郷土民俗芸能公演会に、出身民族背景の異なる外国から招聘されたアジアの儀礼・芸能者たちとが会う機会がその形成機会になっている。また、アイヌ系の人々も来訪する他国の先住民族との交流を通じ、自分の伝統の再構成に向かう同種の位相を示していた。カナダでも、先住民族のクリー族やイヌ族たちがアメリカ西海岸の異なる部族のシャーマンに一時期弟子入りしたり、先住民族のスピリチャリティや宗教に関心をもつ白人系集団が招くメキシコから招いたインディオ系シャーマンの集会でネットワーク形成の機会をもつ事例や、CanAsian 舞踊祭の機会にカナダ内のアジア系やアジア各国から来加した芸能者・舞踊家がネットワーク形成の機会をもつ事例が観察された。こうした様相はオーストラリア先住民の先住民族演劇運動の作家や俳優、シャーマン儀礼詠唱者、アボリジナル画家たちの場合にも観察された。ここには、民族芸能・儀礼・アートをふくむエスノ文化表現に纏わる社会文化的コミュニケ

ーションのグローバルな往復運動によって、ますます変容の度が強まり、一種の混交状態が進んでいく様相もあるが、もともとのローカルな根付きをなくすところまで、ポストモダンの脱領土性を示していくわけではなく、人類学者のNicholas Thomas 1996 が指摘する如く、ローカルな先住民の集団が、外部の主流集団、そしてネットワーク化した外部世界の諸集団との間になす、たゆまない文化政治学的な交渉過程の動態があり、そうしたグローバルな双方向次元での文化政治的なアイデンティティの交渉過程に、エスノ文化表現者の側の象徴表現の変化の場の根底があることが、調査事例の類型抽出を通して見通された。本研究では、このタイプのグローバルな捻れ反転を示す交渉過程を「交錯的再帰作用」という新設概念によって特徴づけた。本研究は、研究予算の枠内の規模に限定して行ったため十分大きな追加事例収集は今後の課題であるものの、文化を跨るエスノ文化表現者事例群像の類型から、新しい上記の分析概念と分析枠組みを構築して示した点では、先駆的成果をあげた部分があると考えられる。また、伝統儀礼・芸能者やエスニックアーティスト、更には彼らが示す原始的異文化芸能やエスノアートに関わり相互交流する特定のタイプの現代芸術家たちには、エスニック芸能者特性位相が通底する局面がある点を呈示しつつ、その局面をトランスナショナル人類学に関連づけて検討した視角と研究成果を示した点は、当該研究分野ではまだ稀少な研究成果であり、先駆的意義をもつと考える。一部の成果は既に発表したか、来年春、共著書籍で総合的検討を示す成果呈示を行う予定。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

2009年7月: 宮坂敬造、「文化を跨る身体」、『慶應義塾大学アートセンター年報』第16号(査読有)(印刷中)

2009, March: Keizo Miyasaka, Challenges for Issues Concerning the Filming of Visual Sensibilities: The Case of Clinically - Oriented Ethnographic Filming, Carls Series of Advanced Study of Logic and Sensibility, Vol.2, pp.311-329(査読有)

2007年4月: 宮坂敬造、「エスノ・アートの交錯再帰的变化とオーストラリア先住民系アートの一局面」、『慶應義塾大学アートセンター年報』(2006-7年度)第14号、24-31頁(査読有)

2005年2月 宮坂敬造、「文化を超える位

相と多文化間臨床過程にやどる根本問題
人類学者にならうシャーマンと多文化間臨床」、『こころと文化』(多文化間精神医学会学会誌) Vol.13, No.1, pp.6-7(査読有)

[学会発表](計 2 件)

2009年2月25日: 宮坂敬造、「文化と医療の経験の場の構造の時代的展開: 学際的相互性が発生する場」、公開シンポジウム<文化と医療>再考 人類学と文化精神医学の相互関与性の現在、慶應義塾大学東館 GSEC-LAB0。

2009年1月11日: 宮坂敬造、「医療人類学と生命倫理: その相補的關係 二つの文化の象徴的媒介者の事例」、第2回京都大学・慶應義塾大学 COE 合同シンポジウム『心・病・文化 医療をめぐる文化と倫理』京都大学時計台記念館2階国際交流ホール。

[図書](計 3 件)

2009年、宮坂敬造ほか3名共編著、『リスクの誘惑』、慶應義塾大学出版会(印刷中)

2006年、宮坂敬造ほか4名共編著、『情の技法』、慶應義塾大学出版会 pp.401-430。

2006年、宮坂敬造、共著『風景の研究』(訳者コメント部分: 単独翻訳「トラウマを呼びこむ時代と虐殺の風景: 戦争被害者の負う心的外傷と“時代一過性の精神の病い”」: Allan Young 著) 慶應義塾大学出版会 pp.279-286。

[その他]

2005年12月、宮坂敬造「モンリオール多民族社会」、『オーロラ』、pp.4-5。

ホームページ

<http://www.mita.cc.keio.ac.jp/flet/myerspac/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮坂 敬造 (KEIZO MIYASAKA)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号: 40135645

(4) 海外研究協力者

Laurence J. Kirmayer,
Director, Division of Social & Transcultural Psychiatry, McGill University, Canada.
Jocelyne Montpetit,
Instructor, National School of Theatre, Canada
Rebecca Edwards,
Writer in Residence, University of Queensland, Australia.